

馬瀬狂言資料の紹介（13）——「佐渡狐」について——

山 本 晶 子

はじめに

本稿では、馬瀬狂言の「佐渡狐」について紹介する。これまで馬瀬狂言資料の中で最も古い年記を有する、馬瀬文化二年本の所収曲について報告してきたが、本稿もそれに続くものである。¹馬瀬で「佐渡狐」の上演が確認できる最も古い記録は、弘化三（一八四六）年の番組である。この番組は、『玉泉流秘書』という台本（中北小すゑ²）の中に書き留められている。

弘化三丙午三月二日ヨリ越坂於養草寺境内ニ晴天三日之間

尾州野村小三郎 天保辛丑歳死
十二月十七日 京嶋原佐久間桑治郎方ニおゐて死去 法名玉泉院

澄誉信定道禅居士七回忌取越馬瀬門弟中相勤申

この記事から、上演場所は越坂の養草寺、馬瀬村で狂言を指導した和泉流狂言師、野村玉泉信定の七回忌の追善供養のための催しであったことが知られる。三月二日から三日間続いた、その三日目の最初の演目に、

佐渡狐 源吉

とある。本曲はこれ以降も折々に上演されていたようで、『狂言番組扣』

等の上演資料では、合計一〇回を数える。台本として確認できるものは、先述の馬瀬文化二年本所収のものと、現行台本（以下、馬瀬現行本とする）⁵である。そこで、馬瀬文化二年本の翻刻と共に、この両本の位置づけと現在までの変遷過程を明らかにする。

一 「佐渡狐」について

「佐渡狐」は大蔵・和泉両流で演じられる「百姓狂言」であるが、これまでの研究により、江戸初期の上演記録がなく、最も古い台本が鷺流の享保保教本や『狂言記拾遺』であることから、江戸中期の成立と考えられている。この内容は、越後の百姓と佐渡の百姓が共に年貢を納めに行く道中で、佐渡に狐がいるかいないかで争い、賭けになる。その判断を奏者に頼む時に、狐のことを知らない佐渡の百姓は奏者に賄賂を使い、ことを有利に進めようとするが、最後に狐の鳴き声を答えられず、越後の百姓に賭け物の刀を持っていかれるという話である。本曲については、これまで橋本朝生氏、田口和夫氏、永井猛氏による先行研究があり、争いのきっかけとなる、佐渡に狐がいらないという事実は当時よく知られていたことが指摘されている。⁶

橋本朝生氏の「狂言台本・曲目所在一覽補遺」⁷に拠れば、和泉流の台

本は二一本ある。山脇派・三宅派共に、本曲の展開に大きな違いはないものの、詳細にみると、展開の一部や詞章に異なるところがある。例えば、本曲の見所である佐渡の百姓が取り次ぎの奏者に賄賂を渡す場面では、「鹿末の事」（馬瀬文化二年本）、「少計」（明和中根本）等と言いながら賄賂を渡すもの、豊年の祝いの品にかこつけるもの（狂言大全集）、更に「お袖の下へお納めなされて下され」（三百番集本）と行為そのものを口に出すものなど、各本で工夫されている。また流儀において明らかな違いが認められるのが、終曲の狐の鳴き声である。『狂言記拾遺』では鶉の鳴き声の「ちゝくわい」、大蔵流（山本東本）では鶏の鳴き声である「東天紅」、鶯流（享保教本）では「ワンワン、グウグウ」等の鳴き声が記されている。和泉流の山脇派は、先の『狂言記拾遺』と同様の「ちゝくわい」が主で、三宅派は鶯の鳴き声の「月星日」（三百番集本）である。馬瀬文化二年本は「ちゝくわい」で、この終曲部からも明らかのように、詞章全体は江戸後期の山脇派系統の台本と認められる。これに対し、馬瀬現行本は「ぐうぐう」と異なる。そこで、初めに馬瀬文化二年本の位置づけについて、山脇派の台本を中心に検討を行い、それを踏まえて馬瀬現行本について考察する。

二 馬瀬文化二年本の展開と諸本との比較

今回の調査では、これまでの調査で取り扱った山脇派の諸本を中心に、明和中根本〈5〉・波形本〈9〉・狂言口授箋〈21〉
和泉流五冊本（茶表紙本）〈34〉・和泉流密書〈75〉・古典文庫本〈77〉
『祖家秘書狂言大全集』〈53〉
の七本に加え、宝暦十年筆和泉流本〈3〉・中尾他三郎筆本〈6〉・二味英文筆和泉流本〈20〉も調査対象とした。また三宅派の詞章を確認するため、

三百番集本も参考として掲げた。⁸ この中で、和泉流密書は、曲の前半の詞章の一部が省略されている。冒頭の奏者の名ノリの後、両国の百姓の道行の箇所まで「餅酒ノコトク」と記されている。このため、異同については、詞章が記載された箇所のみを対象とした。結論からいえば、上記に掲げた一種の台本の中で、馬瀬文化二年本の詞章と最も近いものが二味英文筆和泉流本（以下、二味本）であった。ちなみに馬瀬現行本は、馬瀬文化二年本との共通性は認められるが、詞章の近似性という点では二味本に及ばない。そこで、まず本曲の展開について、馬瀬文化二年本の展開を元に、各場面の内容をまとめたのが「表1 馬瀬文化二年本を基とした「佐渡狐」の諸本の展開」である。「A 場面毎の内容」には、場面毎に、馬瀬文化二年本の詞章を基にして各本に共通する内容を示し、「B 諸本間での主な違い」において、馬瀬文化二年本との違いが明確な箇所や特徴的な詞章（必要な場合は、全体的な場面の傾向を示した）を取り上げ、各本毎にその有無を記号で示した。表中の記号は以下の通りである。各記号の後に付した数字は、各場面で同様の記号がある場合に付した。

●：馬瀬文化二年本の詞章と一致、またはほぼ一致する

■：馬瀬現行本の内容と共通する

○：馬瀬文化二年本の内容と共通するが、詞章に違いがある

△：馬瀬文化二年本の展開や表現の一部に違いがある

☆：馬瀬文化二年本と共通する内容に、異なる内容が加わる

★：☆に該当するもので、馬瀬現行本と共通する

※：馬瀬文化二年本と展開が大きく異なる

×：該当箇所ナシ

表1 馬瀬文化二年本を基とした「佐渡狐」の諸本の展開

	A 場面毎の内容	B 諸本間での主な違い	二馬瀬文化 二年本	現行本瀬	二味本	中明根本和	波形本	文古庫本典	茶表紙	中尾本	十宝本暦	密和泉流	口狂授箋言	大狂全言	集三百本番		
場面1	奏者の名ノリ (文化二年本・現行本該当箇所ナシ)	× 該当箇所ナシ・文／現／明／波／古／茶／密／全／三 △ 奏者の名ノリを記載・二／中／宝／密／口	×	×	△	×	×	×	×	△	△	△	△	×	×		
場面2	①越後国の百姓の名ノリ ②いつも上頭へ御年貢を捧げる ③今年も持って上る ④これまで年貢を納めたことを振り返る ⑤草臥れたので、休んで似合いの人が来たら同道しよう。	○ ①～③の内容が共通・文／現／二／明／波／古／茶／中／宝／口／全／三 × ①～③の箇所が省略・密 ● 去年上ってから一年になる・文／現／二／全 △1 息災で変わらずに上るのは嬉しい・明／古／口 △2 変わらず上るのはめでたい・波／茶／中／宝／三 ☆ 今年も首尾よく納めたい・波／古／中／口	●	●	●	△1	△2 ☆	△1 ☆	△2	△2 ☆	△2	×	△1 ☆	●	△2		
場面3	①佐渡国の百姓の名ノリ ②上頭へ御年貢を捧げる ③今年も持って上る ④自分が年貢を納めに来た経緯を語る。他の者との交代を提案したが、結局自分が上ることになった。	● ①～③の詞章が共通・文／現／二／宝 ○ ①～③の内容が共通・明／波／古／茶／口／全／三 × ①～③の箇所が省略・中／密 ☆ 「嘉例として」・古／三 ● 「是非某に」と要請された・文／現／二／茶／中 △1 「某が参り付た」から上ることになった・明／古／宝／口／全 △2 勝手を知っているから上ることになった・波 △3 「天下治まり目出度い御代」であると述べる・三 ☆ 首尾よく納めたい・古 × ①～③の箇所が記載ナシ・密	●	●	●	△1	△2	△1 ☆	●	●	△1	×	△1	△1	△3		
場面4	①越後の百姓は、佐渡の百姓に声をかける。 ②佐渡の百姓は、用を前にあてて後から先へ行くとだけ言い、行き先を明かさない。 ③佐渡の百姓は、問いかけた越後の百姓に聞き返す。 ④越後の百姓は自分が越後の百姓で、年貢を納めに行く途中であると答える。 ⑤佐渡の百姓は、越後の百姓をねぎらい、逆に越後の百姓は、佐渡の百姓の国を尋ねる ⑥佐渡は、隣の者と答え、越後の百姓が不審がると、佐渡の国の百姓と答え、国隣と越後の百姓は納得する。 ⑦年貢を納めに行くことを確認し、二人は同道することになる。	● ①～③の詞章が共通・文／二 ○ ①～③の内容が共通・現／明／古／茶／中／宝／口／全／三 × ①～③の箇所が省略・波／密 ● ④⑤の詞章が共通・文／二 ○ ④⑤の内容が共通・現／明／古／口 △ 越後の百姓は自ら名乗る。⑤はナシ・三 ×1 ④以降は越後の百姓は都へ上ることを話し、 ⑤⑥の該当箇所はここに記載されず、場面5に移行・波／茶／中／宝／全 ×2 ④⑤の箇所が省略・密 ● 「国隣」・文／現／二 △ 「国向」・明／波／古／茶／中／宝／密／口／全／三 (波／茶／中／宝／全は場面5での問答となる) ● 「某も独りでさひしかつた」・文／二／波／古／茶 ○ 独りで連れがほしい・全／三 ■ 上記の内容ナシ・現／中／宝 △ 「常のごとし」として記載ナシ・明／密／口	●	○	●	○	×	○	○	○	×	×	×	○	○	○	
場面5	①越後の百姓を先にして、また旅を始める。 ②二人は、道すがら似合いの連れであると話す。	● 「牛は牛連れ、馬は馬連れ」の詞章が一致・文／二 ○ 「牛は牛連れ」の表現がある・現／茶／中／密／三 △1 「他生の縁」等の表現を用いる・古／宝／全 △2 該当箇所なく、下りでも同道したい等のト書き・明／口 × 該当箇所ナシ・波	●	○	●	△2	×	△1	○	○	○	△1	○	△2	△1	○	
場面6	①越後の百姓が、佐渡は離れ島なので、不自由だろうとことばをかける。 ②佐渡の百姓は、何も不自由はないという。 ③それに対して、越後の百姓は、佐渡に狐がいなくて狐を尋ねる。 ④佐渡の百姓は、狐がいると主張し、それを聞いた越後の百姓は狐がいはいはずだと確認し、佐渡の百姓はいるという答えを繰り返す。 ⑤二人は、佐渡に狐がいるかどうか、賭禄にし、その判断を奏者に依頼することにする。 ⑥二人は歩き出し、越後の百姓は、佐渡の百姓のことを片意地といい、佐渡の百姓はこの後はわかることだと答える。	○ ①～③の内容が共通・文／現／二／明／波／古／茶／中／宝／密／口／全／三 ★1 越後の百姓が越後の国を引合に出す表現がない・現／二／宝／密／全／三 ☆2 佐渡は毎日舟が着く所・波 ● 狐がいることの表現 ● 「はらはらす程」・文／現／二／明／古／茶／中／宝／密 △1 「くらくらする程」・波 △2 「沢山に」・口／三 △3 「夥しう」・全 ★1 狐を何度も見たことがある・文／現 ★2 狐に限っていないはずである・現／三 ☆3 狐に限らず何でもいる・三 判断を頼みに行く場所について ● 「地頭」・文／現／二 △1 「上頭」・明／古／茶 △2 「お奏者」・波／中／宝／密／口／全／三 ● ⑥の詞章が一致・文／二 ○ ⑥の内容が共通・明／古／茶／中／宝／密／口／全 ■ 「片意地」という記載ナシ・現／三 △ 佐渡の百姓が越後の百姓を無理な事を言うと言と非難する・波 ☆ 両国の百姓が互いに思いも寄らぬ一腰を手にいれることになると喜ぶ・三	○	○ ★1	○ ★1	○	○ ☆2	○	○	○	○	○	○ ★1	○ ★1	○	○ ★1	○ ★1
場面7	①越後の百姓は、狐がいると主張し、それを聞いた越後の百姓は狐がいはいはずだと確認し、佐渡の百姓はいるという答えを繰り返す。 ②二人は、佐渡に狐がいるかどうか、賭禄にし、その判断を奏者に依頼することにする。 ③二人は歩き出し、越後の百姓は、佐渡の百姓のことを片意地といい、佐渡の百姓はこの後はわかることだと答える。	● ①～③の内容が共通・文／現／二／明／波／古／茶／中／宝／密 △1 「くらくらする程」・波 △2 「沢山に」・口／三 △3 「夥しう」・全 ★1 狐を何度も見たことがある・文／現 ★2 狐に限っていないはずである・現／三 ☆3 狐に限らず何でもいる・三 判断を頼みに行く場所について ● 「地頭」・文／現／二 △1 「上頭」・明／古／茶 △2 「お奏者」・波／中／宝／密／口／全／三 ● ⑥の詞章が一致・文／二 ○ ⑥の内容が共通・明／古／茶／中／宝／密／口／全 ■ 「片意地」という記載ナシ・現／三 △ 佐渡の百姓が越後の百姓を無理な事を言うと言と非難する・波 ☆ 両国の百姓が互いに思いも寄らぬ一腰を手にいれることになると喜ぶ・三	● ★1	● ★1 ★2	●	●	△1	△	○	○	○	○	○	○	○	○	■ ☆
場面8	①二人は年貢を納める館に到着し、奏者に引付があるかを確認する。 ②越後の百姓は、時の奏者と答え、佐渡の百姓は引合(引付)の奏者がいるからと、先に納めることにする。	○ ①の内容が共通・文／二／明／波／古／茶／中／宝／密／口／三 ■ 佐渡の百姓が自分の御館はもっと奥だと言、その後、戯れ言だったと明かす場面・現／全 ● 「引合」・文／二 ■ 「引付」・現／明／波／古／茶／中／口／全／三 △ 佐渡の百姓が先に奏者の所へ行く・宝／密 ★ 奏者の名ノリ・現／明／古／茶／三	○	■	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	■	○	
場面9	①佐渡の百姓は、御館の中に入り、案内を乞う。 ②対応に出た奏者に、佐渡の百姓と名乗り、年貢を納めに来たことを告げる。 ③奏者は、年貢を蔵に納めるよう指示する。	● ①～③の詞章が共通・文／二 ○ ①～③の内容が共通・現／波／茶／中／全／三 △ ①②の内容は共通、③はナシ・明／古／宝／密 ※①～③ 越後の百姓から年貢を納める。その後佐渡の百姓が年貢を納めてから、奏者に願ひ事をする・口 ☆ 粗相したことを奏者に咎められる・現	●	○ ☆	●	△	○	△	○	○	△	△	※	○	○	○	

	A 場面毎の内容	B 諸本間での主な違い	二馬 年文化	現馬 行本瀬	二味 本	中明 根本和	波 形本	文古 庫本典	茶 本表紙	中 尾本	十宝 年本曆	密和 泉書流	口狂 授箋言	大狂 全集言	集三 百本番
場面 9	①佐渡の百姓は、奏者に願い出て、同道した越後の百姓と佐渡に狐がいるかないいかで争ったことを話す。	○ ①の内容が共通・文／現／二／明／波／古／茶／中 △ 奏者が佐渡の百姓だけか確認することが加わる・宝／密／三 ※1 賄賂を先に渡してから賭禄の話に移る・口 ※2 該当箇所ナシ。佐渡に狐がいるかどうか、直接奏者に話す場面・全	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	※1	※2	△
	②佐渡の百姓は、国の名折れと思い、佐渡に狐がいないのにいと言った事情を説明し、賭禄になったと話す。	● 狐のいないのを国の名折れとする詞章が一致・文／明／古／中 ○ 狐のいないのを国の名折れと説明する詞章がある・現／二／波／茶／口 × 該当箇所がない・宝／密／全／三	●	○	○	●	○	●	○	●	×	×	○	×	×
	③佐渡の百姓から賭禄の判断を頼まれた奏者は、何を賭けたか尋ね、佐渡の百姓は、一腰を賭けたと言う。 ④佐渡の百姓は、奏者に袖の下を渡す。	● 賄賂を渡す時の表現が「鹿木の事」・文／二 ○ 「鹿木」に類する表現を用いる・現／明／波／古／茶／中／宝／密／口／三 △ 今年が殊の外豊年だから、祝いとして進上する形・全	●	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○
	⑤奏者は最初は拒むものの、最後は受け取る。	● 奏者の懐へ納めることを示す詞章・文／二 ○ 奏者が自分の懐に納めよと言う・現 × 上記の該当箇所ナシ・明／波／古／茶／中／宝／密／口／全／三	●	○	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	①奏者は、佐渡の百姓に同情を示す。 ②奏者は、佐渡の百姓が狐を見たことがないことを確認し、狐の姿、形を教える。	● 奏者は佐渡の百姓の状況を「難儀」と評する・文／現／二／波 × 上記の該当箇所ナシ・明／古／茶／中／宝／密／口／全／三 ☆ 「教えてやろう」という詞章がない・文	● ☆	●	●	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×
場面 10	③格好・色・顔・目・口・尾について、一通り教える。 ④その後、越後の百姓に出るように伝えることを命じる。	○ ③の項目が一致・文／現／二／波／中／宝／密／口／三 △ ③の項目の一部が欠ける・明／古／茶／全 ☆1 狐の声についての説明がある・明／古／茶／中／宝／密／口 ☆2 首尾よくいったことを述べる・全	○	○	○	△ ☆1	○	△ ☆1	△ ☆1	○ ☆1	○ ☆1	○ ☆1	○ ☆1	△ ☆2	○
	①越後の百姓は、戻ってきた佐渡の百姓に納めたかどうか尋ねる。 ②佐渡の百姓は一緒に納めることになったので、奏者の所に出るように伝える。 ③越後の百姓は、名乗り、年貢を納めに来たことを告げ、御蔵に年貢を納める。	● 越後の百姓が単独で納める形で詞章も共通・文／二 ○ 越後の百姓が単独で納める形・現／波／全／三 △ 越後と佐渡の二人で名乗り、一緒に納める・明／古／茶／中／宝／密／口 ☆1 越後の百姓は、奏者のいる場所を佐渡に尋ね、年貢の持ち方を確認してから、納めに出る・現 ☆2 越後の百姓は、奏者のいる場所を佐渡に尋ね、納めに出る・波 ★3 越後の百姓又は佐渡の百姓が奏者のいる場所が違っていたことをもう一方の百姓に伝える・現／波／口	●	○ ☆1 ★3	●	△	○ ☆2 ★3	△	△	△	△	△	△ ★3	○	○
場面 11	①奏者はそれぞれの国から年貢が納められたことを報告し、国を隔てた両国が同日同時に納めたことで御感を蒙ったことを、それぞれの百姓に伝える。 (文化二年本・二味本該当箇所ナシ)	■ 両国の百姓は門前で待ち奏者の報告を聞く・現／全 △1 両国の百姓は奏者の報告を聞く・明／波／古／茶／中／宝／密／口 △2 「常の如し」として記載ナシ・三 ☆1 両国が揃って年貢を納めたことの褒美として、越後と佐渡の百姓に対し、永代万難公事を赦免する・明／波／古／茶／中／口 ☆2 褒美として、暇をもらう・宝／密／全	×	■	×	△ ☆1	△ ☆1	△ ☆1	△ ☆1	△ ☆1	△ ☆2	△ ☆2	△ ☆1	■ ☆2	△2
	①越後の百姓が、奏者に対して、佐渡の百姓と、佐渡に狐がいるかどうかの賭禄をしたので、判断をしてほしいと願う。 ②奏者は賭物が何かを確認し、それぞれの百姓から賭物の刀を預かる。 ③越後の百姓が佐渡に狐はいないことを尋ねると、奏者は同意を示す。 ④それを聞いて、佐渡の百姓は慌てて狐がいることを主張し、奏者も同意する。	○ ①の内容が一致・文／現／二／明／波／古／茶／中／口 △ 佐渡の百姓が奏者に判断を依頼する・宝／密 ※1 両国の百姓が、奏者へ賭禄の判断をしてもらうかどうかの相談を行ってから判断を願い出る・全 ※2 奏者は越後の百姓から賭禄の話聞き、佐渡の百姓に確認する・三 ★1 奏者が賭禄のいきさつを聞いて感想を漏らす「こびた事」・現／明／茶／全 ☆2 「むつかしい事」・三	○	○ ★1	○	○ ★1	○	○	○ ★1	○	△	△	○	※1 ★1	※2 ☆2
場面 13	①納得のいかない越後の百姓は、改めて佐渡の百姓に狐のこと(格好・顔・目・色・尾)を尋ねる。 ②両者のやりとりを聞いた奏者は、佐渡の百姓の勝ちとして、賭物の刀を渡す。 ③刀を受け取った佐渡の百姓は、奏者に別れの挨拶をする。	○ ①の尋ねる項目に格好・顔・目・色・尾がある・文／現／二／波／中／宝／密／口／全／三 △ 上記の項目の一部が欠ける・明／古／茶 ☆1 狐の口の様子を尋ねる・二／波／古／宝／密／口／全／三 ☆2 佐渡の百姓が狐の色を黒いと言い間違える・二／明／波／古／茶／中／宝／密／全／三 ★3 佐渡の百姓が狐の尾がないと言い間違える・現／三 ☆4 奏者は佐渡の勝ちとしながらも、一腰は越後の百姓に戻すよう、佐渡の百姓に言い含める・全 ☆5 佐渡の百姓が別れの挨拶をする時、越後の百姓も一緒に退出する・三	○	○ ★3	○ ☆1 ☆2	△ ☆2	○ ☆1 ☆2	△ ☆1 ☆2	△ ☆2	○ ☆2	○ ☆1 ☆2	○ ☆1 ☆2	○ ☆1	○ ☆1 ☆2 ☆4	○ ☆1 ☆2 ★3 ☆5
	①不審に思った越後の百姓は、再度佐渡の百姓に狐のこと(格好・目・色・鳴く声)を尋ねる。	○ 越後の百姓が、再度狐のことについて尋ねる・文／現／二／明／波／古／茶／中／宝／密 △ 越後の百姓は、鳴く声を聞いていないと言って尋ねる・口／全／三 ☆ 佐渡の百姓は聞かれた特徴とずらした回答を重ねる・宝／密	○	○	○	○	○	○	○	○	○ ☆	○ ☆	△	△	△
場面 14	②鳴く声を答えられない佐渡の百姓は、これまで答えたことでごまかそうとするが、越後の百姓の厳しい追及に、仕方なく鶉の鳴き声を答える。 ③それを聞いた越後の百姓は、刀を取り返し逃げ入る。 ④佐渡の百姓は、自分の刀だけでも返してくれと後に続く。	狐の鳴き声 ● 「ちゝくわい」・文／二／明／波／古／口 ● 「くうくう」・現／茶／中 ● ■ 「くうくう」+「ちゝくわい」・全 △1 「きつねイ」・宝・密 △2 「月日星」・三	●	■	●	●	●	●	■	■	△1	△1	●	●■	△2

表2 「佐渡狐」の諸本の展開 記号数一覧

	●	○	△	★	☆	■	×	※	○●の 合計	★■の 合計	記号の 合計
馬瀬文化二年本	19	8		1	1		2		27	1	31
馬瀬現行本	7	15		7	2	6	1		22	13	38
二味本	18	9	1	1	2		1		27	1	32
明和中根本	3	11	11	2	3	1	3		14	3	34
波形本	3	13	7	1	6	1	5		16	2	36
古典文庫本	4	11	10	1	7	1	3		15	2	37
茶表紙本	3	13	7	2	3	2	4		16	4	34
中尾本	3	13	6		4	3	4		16	3	33
宝暦十年本	2	9	13	1	5	1	4		11	2	35
和泉流密書	1	8	11	1	5		9		9	1	35
狂言口授箋	1	12	11	1	4	1	2	2	13	2	34
狂言大全集	2	9	8	2	5	4	5	2	11	6	37
三百番集本		12	10	4	6	2	4	1	12	6	39

また各台本を掲げる順は、馬瀬狂言の台本を先にし、馬瀬文化二年本と最も近い二味本、以下、馬瀬文化二年本との関係性と台本の成立順を勘案して配した。これらの記号毎の数をまとめたものが、「表2 「佐渡狐」の諸本の展開 記号数一覧」である。

まず馬瀬文化二年本の詞章と一致する●印の箇所が最も多いのが、先述の通り二味本である。馬瀬文化二年本が他本と一致する一九箇所内、一八箇所（●・○印は二七箇所全て）が、二味本と共通する。馬瀬現行本を除いた、他本の●印が多くても四箇所以下であるのに対し、際立つ結果と言える。一方、馬瀬現行本の●印は七箇所、○印が一五箇所と、他本に比べれば多く、馬瀬文化二年本を継承するところは認められる。しかし☆・★・■印の箇所が合わせて一五箇所あり、その中には、他の百姓狂言の表現を参考に改めたと考えられる箇所が含まれる。こうした箇所があることから、二味本に比べ一致度が低い。また、馬瀬現行本との共通性を示す指標として、★・■印の合計を見ると、狂言大全集と三百番集本が共に六箇所と高い数値であった。こうした状況については後述する。この他、馬瀬文化二年本と共通する●印と○印の合計の多い本として、波形本・茶表紙本・中尾本・古典文庫本・明和中根本がある。各本には△印の箇所もあるが、その多くが僅かな表現の違いであることから馬瀬文化二年本は、山脇派の詞章を伝えるもので、各本の成立年代を踏まえると、文化二年という年記相当の一九世紀初頭前後の詞章と推測される。一方、前稿の「木実論」で、馬瀬文化二年本との近似性を指摘した狂言口授箋であるが、本曲で共通する箇所は多くなく、前回の結果とは異なる。こうしたことから、馬瀬文化二年本所収の詞章は、曲毎に伝承のあり方が異なるものであろう。

以下、場面ごとに、補足説明を加える。

〈場面1〉奏者の名ノリ

曲の冒頭に奏者の名ノリが記載されていたのは、二味本・中尾本・宝暦十年本・和泉流密書・狂言口授箋である。他本では、〈場面7〉に記される(馬瀬現行本・明和中根本・古典文庫本・茶表紙本・三百番集本にその詞章が明記されている)。但し、二味本は朱筆の注記の形で加えられていた。また馬瀬の台本を確認すると、平成八年刊行の『馬瀬狂言集』にはこの場面での奏者の名ノリがあるが、現行台本や平成二二年の上演資料では〈場面7〉での名ノリとなっていたことから、表中で×とした。これらの中で馬瀬現行本と以下の四本はいずれもほぼ同じ詞章である。

現 今日の惣者で御さる。何事も承うと存ずる

明 今日のそうしやでござる。何事をも承ふと存ル

古 今日の奏者でござる。何事をも承らうと存る

茶 今日の奏者で御座る。何事も承ふと存る

中 今日の奏者でござる。何事をも承らふと存ル

このように記載される場面が分かれることについて、参考となるのが古典文庫本の「筑紫奥」の記事である。

奏者アトノ後に付て出る。笛の前に居る。両人同道二度目廻りの時、脇坐の少し下へ出て名乗。(略)又素袍にて脇狂言にする時ハ奏者一人始めに真中へ出名乗。

こうした演じ方の違いが台本への記載において表れたものと推測される。

〈場面2〉越後の百姓の名ノリ・道行

越後の百姓の登場は、いずれも定型の名ノリであるが、持参する御年貢について説明する際に、「捧ぐ」「持て登る」「奉る」といった表現が用いられ、各本ごとにわずかながら違いがある。また道行では、馬瀬の台本が共に、去年から一年経ったことを振り返るが、これらに共通するのは二味本と狂言大全集で、他本は異なる詞章となる。

〈場面3〉佐渡の百姓の名ノリ・道行

越後の百姓同様に、佐渡の百姓の名ノリと道行である。道行では、自分が年貢を納めに来た経緯を語る。この経緯の説明は、諸本によって違いがある。

〈場面4〉佐渡・越後両国の百姓の問答

越後の百姓から声をかけ、佐渡の百姓と同道することになる場面である。波形本・茶表紙本・中尾本・宝暦十年本・狂言大全集は、佐渡の百姓は、国名を名乗ることなく、ただ都に年貢を納めに行くだけ答えるため、互いの国を知るのは〈場面5〉となる。また、国名を名乗る⑥の箇所(波・茶・中・宝・全の各本は〈場面5〉の該当箇所)で、馬瀬の台本と二味本のみ佐渡の百姓が「隣のもの」「国隣」という独自の表現を用いる。他本はすべて「向の者」「国向」である。越後と佐渡の位置関係から言えば、「国向」の方が適当な表現である。このように馬瀬の台本や二味本が「国隣」という語を用いたのは、「餅酒」にある越前と加賀の百姓の「国隣」のように、他の百姓狂言の表現に倣ったものと考えられよう。

〈場面5〉両国の百姓の道行

馬瀬文化二年本と以下の六本(現・二・明・古・口・三)は、ここから二人での道行となり、似合わしい連れであることを確認するが、先の波形本

以下五本（記載の省略された密を含めると六本）ではすでに道行に移っており、道行の途中で互いの国を知る。この箇所での二人の問答は、〈場面4〉の諸本の内容と変わるものではない。

〈場面6〉佐渡に狐がいるかどうかの問答

この場面で佐渡に狐がいるかどうかの押し問答となるが、より相手よりも優位であることを誇示するような工夫が各本でなされている。越後の百姓の、

明 越後とハ違ふて無イ物がお、かるふ

また佐渡の百姓の、

波 佐渡ハ嶋なれども毎日／＼舟ハ着なり。何もかも無物ハ無

といった詞章などが良い例であるが、馬瀬の台本と二味本はいずれも、

文 殊の外自由な所じや

現 事の外便利な所じや

二 殊の外自由な事じや

といった簡潔な形である。その代わり馬瀬の二本では、狐の有無を問う箇所（④★¹）で、越後の百姓は佐渡の百姓に見たことの有無を尋ねる問いかけをする。この問いかけは、馬瀬文化二年本と馬瀬現行本のみで、二味本にはない。この馬瀬特有の問いかけにより、佐渡の百姓はより追い詰められるだろう。

同様に馬瀬の二本と二味本に違いが認められるのが、佐渡に狐がいるかいないかの賭祿の判断を委ねる先である。表1の場面6の⑤に示した通り、

その先を奏者とするか、上頭とするかが諸本によって分かれる。それぞれの例を示すと、

波 ア「されハお奏者にわけてもらうまいか

明 ア「それ社^上等エ居ておそうしやをたのもふ（傍線は稿者 以下、同様）

この「上等（上頭）」の箇所が馬瀬文化二年本は、

是ハ御地頭へ往て、御奏者をたのもふ

と「地頭」とする。馬瀬現行本と二味本も「地頭」である。この「地頭」という表現を有するのは『狂言記拾遺』である。『狂言記拾遺』には各流儀の展開と異なり、賄賂の場面はない。そのため争い事は年貢を納めた後の帰り道となり、同一の場面には当たらないが、年貢を納めに行く場所として「都の地頭殿」という表現が認められる。曲の冒頭の、越後の百姓の名ノリで、

毎年都の地頭殿へ御年貢を納に上ります

とある。この名ノリは、諸本で「上頭」となっていた箇所が「地頭殿」となる。馬瀬文化二年本、馬瀬現行本、二味本も名ノリでは「上頭」の語を用いながら、この箇所のみ「地頭」を用いている。馬瀬だけでなく、二味本にも認められることから、共通する本文があったことが想定される。こうした『狂言記』系の本文と馬瀬狂言の関わりについては、すでに報告した通り、『狂言記』系の本文を伝える曲（胸突・井礪等）が複数あったことが知られる。この「地頭」という語を用いていることは、『狂言記』系の本文との関わりを示すものと考えられないだろうか。

〈場面7〉両国の百姓は年貢を納める館に到着する

この場面も百姓狂言の定型である。その中で、馬瀬現行本と狂言大全集が、佐渡の百姓が自分の御館は奥にあることを述べ、一旦別れの挨拶を交わした後で、ここが自分の館だと明かし、戯れ言であったと告げる展開となる。こうした展開は、「餅酒」等の百姓狂言に認められるものである。

また各本の違いを示す特徴的な表現として、取り次ぎを頼む人物のことを馬瀬文化二年本と二味本は「引合」とする。それ以外の本はすべて「引付」である。いずれも紹介者の意味であるが、馬瀬文化二年本所収の「三人夫」でも「某ハ引合カ有」とあり、「引合」の表現を用いている。逆に馬瀬現行本では「引付」と他本と共通の表現を用いる。馬瀬狂言の、他の台本の百姓物の曲を確認すると、「餅酒」（中林慶三 30ノ15）では、

「そなたわ時のをそうしやか引合^{マツ}があるか」「それかしわ引合^{マツ}がある

と「引合」としながら、「合」の文字に傍注で、「付」と記されていることから、「引合」から「引付」へと変化しつつあることが認められる。

〈場面8〉佐渡の百姓が年貢を納める

本曲で年貢を納める手順には、二通りの展開がある。一つはそれぞれの百姓が蔵の前まで持参し、その後（〈場面11〉）両国で納める形とするか、またはそれぞれ別に納める形とするかである。また狂言口授箋では、年貢を納める順序が異なり、越後の百姓が先となる。更に馬瀬現行本では、佐渡の百姓が奏者に会うところで、奏者の前を行き過ぎ、奏者に詫げる場面が加わり、その後、年貢を納めるという展開となる。

〈場面9〉佐渡の百姓が奏者に賄賂を渡す

年貢を納めた佐渡の百姓は奏者に狐の有無を賭禄にしたことを話し、賄

賂を渡して有利にことを進めようと願ひ出る。賄賂を渡す時の詞章は以下の通り、小異がある。

龜末の事てハ御座れども	・文・二
寸志の品でござりまする	・現
少計てこされ共	・明・古・茶・中
おめにかけるやうな物でハござらぬ	・口
進じます様な物でハ御座りませぬ	・宝・密
近頃寸志ながら	・三

また狂言大全集は、佐渡の百姓が奏者に対し、佐渡に狐がいるかどうかの話題を出し、それに関連づけて願ひ出る展開から、豊年の祝いの品として渡す。一方、狂言口授箋は〈場面8〉で越後の百姓が先に年貢を納め、続いて佐渡の百姓が年貢を納め、先に賄賂を渡してから、賭禄となった事情を話すという独自の展開となる。

〈場面10〉佐渡の百姓は奏者から狐のことを教わる

この場面は、賄賂を受け取った奏者が佐渡の百姓に、狐のことを教えるところである。狐の説明は諸本に共通するものながら、取り上げる特徴やその詞章に多少の違いがあり、すべて一致するものは、同文の関係にある宝暦十年本と和泉流密書以外にない。諸本に共通する狐の特徴として、狐の格好・色・尾は必ず含まれるが、顔や目、口、声の特徴の有無は本によって異なる。その中でも声を説明するのは、明和中根本・古典文庫本・茶表紙本・中尾本・宝暦十年本・和泉流密書・狂言口授箋である。「くわい／＼」という表現は、終曲の「ち／＼くわい」との重なりが想像されるものであろう。

〈場面11〉両国の百姓、または越後の百姓が年貢を納める

この場面は〈場面8〉で示した通り主に二通りの展開があり、佐渡・越後の百姓がそれぞれ年貢を納める形と二人で納める形がある。またその後にある、両国の百姓の問答も諸本で異なる。その中でも馬瀬現行本は☆・★印が二箇所（1・3）と特徴的な展開が認められる。この点については後述する。

〈場面12〉奏者は年貢が納められたことを上頭に報告し、そのことを百姓に伝える

奏者から両国の年貢が納められた報告があり、その褒美が伝えられる場面である。馬瀬文化二年本と二味本には、この場面がない。しかし二味本にはこの場面の詞章と思われる「ソ「両国の者、斯の通り、ハア／＼」という注記があり、馬瀬現行本にはこの場面があること、また三百番集本では「常の如し」と省略されることから、定型により記載を省略した可能性があらう。

〈場面13〉越後の百姓は奏者に賭祿の判断を依頼する

この場面も展開に大きな違いはないが、狂言大全集では、兩人が年貢を納めたところで、佐渡の百姓がそのまま退出しようとし、越後の百姓が呼び留め、押し問答の末、越後の百姓が奏者にその判断を願い出る展開が加わる。また奏者は百姓の頼みを聞き届けるが、賭祿になったいきさつを聞き、その感想を漏らす詞章が馬瀬現行本の他、明和本・茶表紙本・狂言大全集、三百番集本に認められる。

〈場面14〉越後の百姓は、改めて佐渡の百姓に狐のことを尋ねる

この場面でも、〈場面10〉と同様に尋ねる狐の特徴や問答に小異がある。その中で佐渡の百姓が狐の特徴を言い間違える箇所があり、言い間違えの

中でも「尾がない」という表現は、馬瀬現行本と三百番集本に認められる。

〈場面15〉越後の百姓は佐渡の百姓を呼び留め、狐のことを再度尋ねる

この場面での展開は、再度狐のことを問い質す形と、狐の鳴き声を聞いていないからと呼び留める形、の二つに分かれる。後者は狂言口授箋・狂言大全集・三百番集本で、それ以外は再度問い質す形である。また狐の鳴き声は、先述の通り、「ちゝゝわい」という鳴き声が山脇派の主要台本で認められるが、馬瀬現行本と茶表紙本は「くうくう」、狂言大全集はその「くうくう」「ちゝゝわい」と合わせた形、更に宝暦十年本と和泉流密書では「きつねい」となる。この両本は鳴き声も独特であるが、狐のことをめぐる両国の百姓の問答も他本と異なる（以下、宝暦十年本を引用）。

アトさふ有バ形ハどの様な物じや。 シテ形ハ犬より少し大キヤ／＼小サイ物じや。（略）アト目ハ シテふつさりと長イハ。ア、イヤ立に切て有／＼。

と、特徴をずらして答えることで、越後の百姓が「はて扱めんよふな」と不審に思っ鳴き声を探ねるといふ、より自然な流れになっていることがわかる。こうした共通の詞章を持つ宝暦十年本と和泉流密書は、この場面に限らず、曲全体にわたり、ほぼ同文の関係にあることが今回の調査で明らかになった。両本の関係についてはこれまで報告されることがなかったが、他の曲も同様に共通の詞章を有するかどうかの調査を継続しており、詳細は別稿に譲る。

こうした諸本の比較から、本曲は共通した展開ながらも、場面によって多少の異なりが認められた。まず馬瀬の台本についてみると、馬瀬文化二年本は、〈場面12〉の該当箇所がなく、「地頭」「引合」などの他本とは異

なる表現等も一部認められたが、全体的には二味本と共に、☆印や★印にあたる特徴的な展開や詞章が少なく、他本に比べて簡潔な展開や表現を有する。一方、馬瀬現行本は、馬瀬文化二年本の特徴的な表現を引き継ぐところが認められるが、更に独自に加えた箇所や三宅派の三百番本集と重なる箇所も有し、現行に至るまでに改変が加えられていたことが窺える。また馬瀬以外の諸本の中では、明和中根本、波形本、古典文庫本、茶表紙本、中尾本は、本文として比較的近い関係にある一方で、宝暦十年本と和泉流密書、また狂言大全集と狂言口授箋は、諸本の中で異なりが大きいと言える。特に狂言大全集と狂言口授箋は、※印の箇所（場面8）（場面9）（場面13）があるように、他と異なり、独自の工夫がなされた展開が認められた。馬瀬文化二年本との近似性が指摘されていた狂言口授箋であったが、本曲で馬瀬文化二年本との関係性が薄くなったのは、こうした台本のあり方に因るものであった。次に、馬瀬文化二年本の詞章と最も近い関係にある二味本との異同について取り上げる。

三 馬瀬文化二年本と二味本の比較

二味本の成立については、最終丁の奥書（弘化四丁未仲冬写了之／二味英文蔵書）により、弘化四（一八四七）年に書写されたものであることがわかる。所収曲は一二曲で、「佐渡狐」の他、「不聞座頭」「八句連歌」「鐘の音」「蟹山伏」「伯母ケ酒」「ひくす」「才寶」「入間川」「靱さる」「宗論」「左右八」（宗八）である。この二味本と馬瀬文化二年本との異同をまとめたものが、「表3 馬瀬文化二年本と二味本の異同」である（紙数の都合で仮名遣い・表記・清濁の違いは示さない）。

〈凡例〉

・馬瀬文化二年本の詞章を元に二味本との異同をまとめた。該当箇所は、【翻刻】の馬瀬文化二年本の傍注に数字を付して示した。二味本には注記があるが、馬瀬文化二年本には全くない。また役名についての記載は一定ではないが、今回の調査においては台詞のみを対象とした。

・異同箇所は、文節の単位を基本にしたが、必要に応じて複数の文節や文で示した箇所もある。記号は以下の通りである。具体例と共に用例数を示した。

- ① 語句の違い：No.2（毎も／毎年）・四〇
- ② 語の有無：No.3（事（マ）／×）・三二
- ③ 助詞、助動詞の有無や違い：No.7（申たれとも／申て御座れ共）・四五
- ④ 一文の有無、または全体が異なるもの（役柄の違いもここに含めた）：No.27（中／能ふ御座らふ）・四五

これらの異同は、全体で一六二箇所であった。場面展開で両本の違いとして指摘できるのは、先述の〈場面1〉の奏者の名ノリの有無と、終曲の〈場面15〉である。再度越後の百姓が佐渡の百姓に狐のことを尋ねるところで、馬瀬文化二年本は、「なり」「目」「色」「なく声」の順で狐の特徴を執拗に尋ねるが、二味本は「なり」を聞いた後、すぐに「鳴声」となる。その後は、馬瀬文化二年本が鳴声について、「犬よりハちいそふなく」といった後すぐに「ちくくわい」と答えて終曲になるのに対し、二味本は「犬より小さふ鳴」「黄に赤ふ鳴」「立ニ付て鳴」と鳴き声をごまかす場面が長い。本曲において、狐の特徴を尋ねる場面は、諸本間での異なりが大きい。特徴が提示できれば、順序や細部は柔軟に演じられていたようで、両本においても④の数が〈場面14〉〈場面15〉に多く、同様の傾向を示したものであろう。上記の箇所以外、展開の面では両本に違いは認められない。またこれらの中で、語句や文の該当箇所がない箇所（×印）について調

表3 馬瀬文化二年本と二味本の異同

	No.	馬瀬文化二年本	二味本	違い		No.	馬瀬文化二年本	二味本	違い
場面1	1	×	奏「今日之御奏者て御座る 何事も御用を承はらふと存ル	④	場面6	44	せふか	せふ	③
						45	かけふぞ	懸よふ	③
場面2	2	毎も	毎年	①		46	シ	ア	④
	3	事(ママ)	×	②		47	×	扱	②
	4	いかふ	殊の外	①		48	誰かよかろふそ	誰ニ成シて貰ふそ	①
	5	人	者	①		49	ア	シ	④
	6	して	致して	①		50	是ハ	夫こそ	①
場面3	7	申たれとも	申て御座れ共	③		51	御奏者を	御奏者に	③
	8	せひ	是非共	③		52	たのもふ	なして貰ふまいか	①
	9	参れ	持て登れ	①		53	シ	ア	④
	10	まいる	登る	①		54	扱々	扱	④
場面4	11	×	イヤ	④	場面7	55	たしかに	たしか	③
	12	通らしまする	通らします	③		56	聞たか	聞ましたか	③
	13	おりやる	御座る	①		57	しるゝ	しれる	③
	14	あてゝ	当	③	場面8	58	ゆかしませ	×	②
	15	あろふ	有ふか	③		59	御地頭	これ	①
	16	登らしますのふ	登らします	③	場面9	60	其通しや	是じや	①
	17	×	扱	②		61	あん内と	案内か	③
	18	ものしや	者ておりやる	③		62	御座る	御座るか	③
	19	見しらぬか	見知らぬ	③		63	×	夫ハ	②
	20	×	夫ハ	②		64	風与同道致て路次て申ハ	道連ニ成まして色々の話を致し増□	④
	21	捧ケに登ル	持て登る	①		65	狐ハ	狐か	③
	22	事	者	①		66	あるまい	無	①
	23	致そふ	せう	①		67	成程	私ハ有と申増□□	④
場面5	24	ゆかしませ	いさ御座れ	①		68	申せハ	申てハ	③
	25	御先しや	×	②		69	そんなして	存し	③
	26	ゆかしませ	御座れ	①		70	×	ふと	②
	27	中々	能ふ御座らふ	④		71	掛禄を	掛禄に	③
	28	同心	同心の	③		72	かけたそ	懸た	③
	29	そ(ママ)かしも	某も	③		73	事てハ	事で	③
	30	百姓	御百姓	③		74	是をあけませう	御奏者へ上増る	④
場面6	31	佐渡の国は	佐渡ハ	②		75	事を	物を	①
	32	はなれ嶋しや程に	離れ嶋しやニ仍て	①	場面10	76	うくる事ハならぬ	そちへ	④
	33	越後と違ふて囃	×	②		77	おさめませう	入ましやふ	①
	34	何かに	何角	①		78	×	ムウ〜	②
	35	所しや	事じゃ	①		79	扱	扱々	①
	36	ハア	×	②		80	夫ハ	×	②
	37	狐か	狐杯ハ	①		81	なんしもし、か、つた事しや	×	④
	38	×	シ「狐か ア「中〜	④		82	なんきに	難□をするて	①
	39	ある	居	①		83	あろふ	有らふなア	③
	40	ある	居る	①		84	×	すれハ	②
	41	×	事じゃ	②		85	狐ハ	狐ヲ	③
	42	ア「かてんのゆかぬ事しや たしかに狐はないと聞たか すれば狐をそなたハ見た事かあろふ シ「いかにも度々見た事しや	×	④		86	事も	事か	③
	43	狐か有か無イか	是を	④		87	見た	見ました	③
						88	事ハ	事が	③
						89	×	そふあらは狐のなりかつかふを教へてやろふ	④
						90	狐ハ	狐と云者ハ	①

	No.	馬瀬文化二年本	二味本	違い		No.	馬瀬文化二年本	二味本	違い
(場面 10)	91	×	シ「ハア	②	(場面 14)	131	×	との様な物じや	④
	92	赤いものしや	赤イシ	①		132	ソ「と、 シ「と、	ソ「と、とがつて有	④
	93	×	細ふて	②		133	×	ア「さふ有らハ口ハとの様な物じや シ「口か ア「中 〱 ソ「口ハ耳せ、迄切てシ「耳せ、迄切て有る	④
	94	あつて	有る	③		134	×	シ「まつ黒な物しや	④
	95	×	有る	②		135	×	物じや	④
	96	×	有る	②		136	ア「尾ハとの様なものしや	ソ「フ、 シ「フ、ソ「フ、さり	④
	97	さへ言ハさつとすむ事しや	心得	④		137	ふうさり	ふさりふさり	③
	98	いかにも心得ました	成程覚ました	④		138	是ハなんしかしや	汝か勝ちじや	④
	99	御百姓も一所に申あけふ	国の者も是へ出よふといへ	④		139	是を	×	②
	100	こふ通せ	×	②		140	あの者か	あの者の	③
場面 11	101	いかにも納た	×	②	場面 15	141	申	×	②
	102	出さしませ	あれへ上ケさしませ	④		142	御奏者	御奏者か	③
	103	御座りまする	御座る	③		143	シ「今ので知れて有るア「いや〱ぜひととわふ	×	④
	104	御年貢を捧まする	毎も捧まする御年貢て御座る	④		144	なり	狐ハ	①
場面 13	105	路次より同道致て	道連ニ成まして 色々の話しを致しまするに	④		145	犬よりハ	犬より	③
	106	佐渡に	佐渡ニハ	③		146	×	扱々	②
	107	狐ハ	狐か	③		147	ア「目ハ シ「目ハたつについてある ア「色ハ シ「色ハきつね色とゆふて黄に赤いものしや 知れた事を問人しや	×	④
	108	申	申増する	③		148	×	左右あらバ	②
	109	申まする	申増るか	③		149	×	シ「ヤア ア「鳴声を云エ	④
	110	夫を	是を	①		150	×	鳴声ハ	②
	111	掛禄を	懸禄に	③		151	×	シ「ウ、鳴声か ア「中〱	④
	112	かけたそ	懸た	③		152	とかつてなく	シ「黄ニ赤ふ鳴 ア「夫ハ色じや 鳴声を云エ シ「ウ、鳴声か ア「中 〱 シ「鳴声ハ立ニ付て鳴	④
	113	なして下されれうならは	おなし被成て下されふならハ	④		153	いや愛な者か	是ハ某をなふりおるそうな	④
	114	×	先	②		154	いわぬにおいてハ	いはぬ内ハ	①
	115	おこせ	あづけい	①		155	あ、	×	②
	116	×	ソ「両国の者 斯の通り ハア〱	④		156	いやこ、な者か	あの横着物	④
	117	扱	扱申	①		157	皆	×	②
	118	ないかちやうて御座りませうな	御座りませぬナア	④		158	おくしおろ	おくさしめ	①
	119	佐渡に	佐渡にハ	③		159	やい〱汝か一腰ハやらふ	×	④
	120	狐ハ	狐か	③		160	×	せめて	②
	121	有ルとも	有	③		161	某かハ	某の一腰ハ	①
	122	ある	居る	①		162	やい〱とふそもとしてくれい〱 ならぬそ〱	おくして呉イ〱	④
	123	×	事じや	②					
場面 14	124	×	狐ハ	②					
	125	承た	聞た	①					
	126	いやなふ〱 「何事しや	×	④					
	127	先	左右あらは	①					
	128	狐ハそれ	シ「狐か ア「中〱	④					
	129	ア「犬か何とした	×	④					
	130	×	ソ「成程犬より小サな者しや	④					

べると、馬瀬文化二年本が三〇、二味本が一九と、明らかに馬瀬文化二年本の用例数が多いことが認められる。例えば、〈場面10〉の奏者が佐渡の百姓に狐の特徴を教える場面での詞章（No.89）、

そふあらは狐のなりかつかふを教へてやるふ

はどの諸本にもある、重要な台詞であるが、馬瀬文化二年本にはない。また二味本には、ト書きの注記が全体で二八箇所を数える。例として〈場面2〉の越後の百姓の名ノリを掲げると、

シ「越後の国の御百姓で御座る

シテ住ニテ片ヒサ突両手突テ云

と、朱筆で役者の立ち位置や動きについて記されている。このような点を踏まえると、二味本の方が馬瀬文化二年本よりも台本として整っていると言えるだろう。この二味本と馬瀬文化二年本の所収曲の中で、「佐渡狐」以外重なるものがないため、こうした近似性が本曲に限ったものであるのかは不明であるが、二味本の他の所収曲については、馬瀬狂言資料の調査対象に含めて確認していきたい。

四 馬瀬現行本の特徴

最後に、馬瀬現行本の特徴について、馬瀬文化二年本や他本との関係を踏まえ、考察する。まず、馬瀬文化二年本に共通するところとして、先述の通り、

- ・ 佐渡と越後を「国隣」とする
- ・ 年貢を納める場所を「地頭」とする

・ 佐渡と越後の百姓の問答で、狐を見たことがあるとする

三点ある。他にも越後の百姓の名ノリで早くも一年が過ぎたことの感慨が述べられるなど、●・○印の箇所が二二と、馬瀬文化二年本が他本と共通する箇所の約八割の数となることから、近い関係にあると言えるであろう。しかし一方で異なる展開の箇所もあり、先述の〈場面8〉の年貢を納めに御館を訪れた佐渡の百姓が奏者の前を行き過ぎて、叱責されるという場面は、諸本にはない。また〈場面7〉の御館に到着した当初、佐渡の百姓が自分の御館であることを認めないという問答も狂言大全集以外はない。しかしこれらは、他の百姓狂言で演じられるもので、すでに和泉流最古本の天理本に認められる。奏者に叱責される場面は、

のち、越前納る、知らで奏者の膝元へ行、奏者、扇て着する也（餅酒）

また御館の場所をわざと誤る場面は、

都に着ゐて、淡路と尾張は、此御館と云　シテ「我等のは、是ではなひと云、戯れ事、常の御年貢と同じ（三人夫）

こうした百姓狂言の形を参考にした展開と言えよう。

更に〈場面11〉の年貢を納めに行く越後の百姓に対して、佐渡の百姓が年貢の持ち方をアドバイスする場面がある。これは、

佐「おゝやいやい百姓のおめたと言ふものは見苦しいものじゃ
もそっと上げて持っていかれい

え「此れでよかろうか

佐「もそっと上げい（略）

え「いやもう手がのびぬわいい」

と越後の百姓が、佐渡の百姓の言葉に従い、無理に手を伸ばす所作が繰り返される場面となる。こうした百姓の振るまいについては、三宅派や大蔵流の百姓狂言（「餅酒」「三人夫」等）が参考になる。「餅酒」を例に掲げると三百番集本では、

シテへ心得た。百姓の臆^{おそ}めたは悪い。のしきつて参らう。

大蔵虎寛本では、

（アド）「此様な所で百姓のおめたは見苦しい物じや。をめずおくせずつかけて持ておりやれ。」

とあり、これらの例と同様のものと考えられよう。ただこの「餅酒」では年貢を納める時の心持ちについて説いているが、馬瀬現行本では年貢を無理に高く掲げるという具体的な所作が伴い、笑いにつながる。こうした点は、特色ある演出と言えるのではないだろうか。

また三宅派や大蔵流の台本に共通する箇所は他にも認められる。〈場面6〉の④の狐がいるかどうかの百姓同士の問答では、

現 え「いや余のものはいようが狐にかぎってないはずじやが

佐 「狐はとりわけ沢山いる

三 アドへ餘の物は居ようが。狐に限って居らぬ筈ぢや。

シテへ取分け澤山に居る。

とある。また〈場面9〉の④の賄賂を渡す演出では、

現 佐（「前略」これは寸志の品でござりまする。どうぞ袖の下へ納て下され。
三 シテへはあ。笑ふ。あゝこれは近頃寸志ながら。どうぞお袖の下へお納めなされて下され。

と、三百番集本の詞章に近似する。大蔵流でも「とりわけ狐が、たくさんに居る」や「私の寸志」（山本東本）という表現が認められる。他にも越後の百姓が狐の特徴を聞く中で、佐渡の百姓が狐の尾がないことを口走るところも同様と言えよう。

このように、馬瀬現行本では、三宅派の「佐渡狐」や他の百姓狂言の詞章を撰取し、更に独自の演出を加えていたことが認められた。こうした変化がいつの時期に行われたのか、馬瀬に伝わる「佐渡狐」の台本が他にないため、明らかにしない。しかし〈場面7〉〈場面8〉〈場面11〉は、他の百姓狂言に認められる。現行の『馬瀬狂言集』の「昆布柿」では御館に到着したところで、

丹 「某しのはずっと奥でおりやる」

あ 「其の様な事としたなれば道で御茶なりとも申さうものを」

丹 「先づそれ迄はさらば」

あ 「さらば」

二人 「さらばさらばさらば」

丹 「とは言ひたいものの某しの上る御館もこれでおいやる」

あ 「さてさて此方はざれ事をはたさぬ人ぢや」

と、「佐渡狐」と共通する問答がある。また〈場面8〉〈場面11〉の箇所についても「佐渡狐」と共通する詞章が認められた。これらの例から、現行

の百姓狂言で共通する場面の詞章を統一した可能性が考えられないだろうか。この検証には、各曲にわたる類型的な演技の伝承についての分析が必要となるが、この点については別稿で改めて取り上げたい。

また、こうした三宅派の詞章が馬瀬現行本に認められることについては、すでに報告した通り、馬瀬文化二年本の「飛越」¹¹の前半が三百番集本の詞章に通じること、また「今神明」の終曲部に三百番集本の演出と重なるものが認められることなど、馬瀬文化二年本にも三宅派の詞章と関わる事例が一部に確認できる。このような事例があることから、山脇派系統であることに変わりはないが、三宅派の詞章の撰取がどのような曲、資料に認められるのかについては、今後の調査で明らかにしていきたい。

おわりに

本稿では、馬瀬狂言で伝承されてきた「佐渡狐」について、馬瀬文化二年本と馬瀬現行本の位置づけを明らかにした。馬瀬文化二年本の詞章は、文化二年という年記の通り、一九世紀初頭前後の山脇派系統のもので、比較的簡潔な展開であることが認められた。比較した諸本の中では、二味本に近似した詞章であることが明らかにした。この二味本は、これまで十分に調査されていない資料であり、今後主要伝本との比較調査を行い、馬瀬狂言との関係やその位置づけについても追究したい。

また馬瀬現行本では、馬瀬文化二年本の詞章を引き継ぎながら、他の百姓狂言の演出を取り込む等の改変が認められた。これまで馬瀬狂言の詞章においては、時代が下るにつれて、簡潔化・省略化の傾向があることを指摘してきたが、その傾向とは異なり、むしろ新たに演技を追加したところが複数認められた。こうした改変は、他の百姓狂言に倣ったもので、支障

なく演じられたものである。この改変が行われた理由を考えるにあたり、もう一つ改変されたものとして着目したいのが終曲の「ぐうぐう」という鳴き声である。山脇派の「ちくくわい」という鳴き声からの変更で、諸本を見てもその鳴き声を演じる台本は限られる。こうした形をあえて選んだのは、スタンダードなものに少し変化をつけ、独自色を加えることを意図したからではなかったろうか。これまで紹介した馬瀬狂言資料の中にも独自の演出や詞章が認められたが、本曲においても、同様の傾向を認めてよいのだろう。「佐渡狐」は、弘化三年以降も、定期的に上演されていた。馬瀬で上演された百姓狂言は、「餅酒」(五回)、「昆布柿」(二回)、「三人長者」(一回)と、いずれもそれほど多くはない。その中で一〇回の上演、更に現行曲でもある「佐渡狐」は人気のある一曲だったのだろう。上演を重ねる中で改変され、現行の形に整えられていった。「佐渡狐」は馬瀬狂言の変遷と姿勢がうかがえる一曲と言えるだろう。

注

- 1 拙稿「馬瀬狂言資料の紹介(10)——「鴈礫」について——」(『学苑』929 二〇一八・三)、「馬瀬狂言資料の紹介(11)——「今神明」について——」(『学苑』939 二〇一九・一)、「馬瀬狂言資料の紹介(12)——「木実論」について——」(『学苑』951 二〇二〇・一)

- 2 馬瀬狂言保存会での所蔵番号。この資料の詳細については、拙稿「馬瀬狂言資料の紹介(2)——台本に見える上演記録・曲名索引——」(『学苑』703 一九九八・一二)で報告した。この中で、本書を『泉流秘書教番』と紹介したが、その後、馬瀬狂言保存会で付された書名が『玉泉流秘書』であったので、それに倣い書名を改めた。

- 3 養草寺は、現在も伊勢市宮後にある浄土宗寺院で、他にもこの地で追善狂言

が行われたことが『狂言番組扣』に認められる。

- 4 拙稿「馬瀬狂言資料の紹介(1)——「狂言番組扣」を中心に——」(『学苑』696
一九九八・三)、および注2の「馬瀬狂言資料の紹介(2)——台本に見える上
演記録・曲名索引——」参照。

- 5 現在の台本を主に、『馬瀬狂言集』と平成二二年の馬瀬町秋祭りの映像を参考
にした。

- 6 橋本朝生著『狂言の形成と展開』(みづき書房・一九九六)、田口和夫著『能・
狂言研究——中世文芸論考——』(『古典の窓』佐渡狐)の袖の下」(三弥井書店・一
九九七、同「研究十二月往来」三三九)「佐渡狐」の袖の下、再論」(『鍔仙』
677 二〇一八・二)、永井猛著「佐渡狐」(『研究資料日本古典文学 第十巻 劇文学』
所収・明治書院・一九八三)

- 7 橋本朝生著『続 狂言の形成と展開』(瑞木書房・二〇二二)所収。
次項の調査対象に付したへ、の番号は、橋本氏のご論考で付されたもの
である。

- 8 資料として使用した台本と台本に関する参考文献は以下の通りである。
なお、原文を引用する場合は、適宜句読点を付した。また、原文に付されて
いる振り仮名、傍注等は省略した。なお、各諸本を提示する際には略称(傍
線部)を用いた。

天理本 『狂言六義』(天理図書館善本叢書二四・天理大学出版部・一九七五)、
『天理本狂言六義 下』(北川忠彦他校注・三弥井書店・一九九五、『狂言六義全
注』(北原保雄、小林賢次著・勉誠社・一九九二)

明和中根本 法政大学能楽研究所蔵

波形本 法政大学能楽研究所蔵の紙焼写真にて確認

古典文庫本 『和泉流狂言集 第二冊』(古典文庫・一九五三)

茶表紙本 法政大学能楽研究所蔵『狂言本茶表紙六儀』

宝暦十年筆和泉流本 京都大学文学研究科図書館蔵『和泉流傳狂言六義』

中尾他三郎筆本 法政大学能楽研究所蔵『仮綴本和泉流狂言本』

二味英文筆和泉流本 国立国会図書館蔵『狂言』

狂言口授箋 国立国会図書館蔵『狂言口授箋』

狂言大全集 国立国会図書館蔵『祖家秘書狂言大全集』

和泉流密書 国立国会図書館蔵『和泉流密書』

狂言三百番集 『狂言三百番集 上』(野々村戒三、安藤常次郎共編・能楽書林・
一九四二)

大蔵虎寛本 岩波文庫『能狂言 上』(笹野堅校訂・岩波書店・一九四二)

『狂言記拾遺』『狂言記拾遺の研究』(北原保雄、吉見孝夫著・勉誠社・一九八七、

- 9 注1の拙稿「馬瀬狂言資料の紹介(12)——「木実論」について——」参照。
10 拙稿「馬瀬狂言資料の紹介(5)——『狂言記』系の台本」(『学苑』833 二〇一
〇・三)

- 11 注1の拙稿「馬瀬狂言資料の紹介(10)——「鴈礫」について——」馬瀬狂言
資料の紹介(11)——「今神明」について——」参照。

【翻刻】

〈凡例〉

一、この本文は、馬瀬文化二年本(中屋豊和氏蔵(所蔵番号 中屋豊和七ノ三))
の「佐渡狐」を翻刻したものである。

一、翻刻にあたっては、原則として現在通行の字体を用い、適宜句読点を付した
(当て字・反復記号「ヽ」「ヾ」「ミ」「ノ」は底本のままとした)。また見せ消
ちの箇所は、補筆訂正された語句を採用した。

一、仮名遣いについては、底本の通りとした。清濁、振り仮名も底本のままである。
一、セリフの初めの「」の記号は「」に統一した。役名の記載がない場合は、適宜
() で補った。

一、底本における誤脱と判断される不審箇所には「ママ」を付した。

佐渡狐

(ア)「越後国の御百姓で御座る。毎も上頭へ御年貢を捧ル。当年も持て登ふとそんする。誠に去年持て登つたを近イ事の様に存たか、はや一とせになった事しや。イヤ是まできたれハ、いかふくたひれた。是にやすふて似合しい人も通らは、詞をかけ同道して参ふと存る。(シ)「佐渡国の御百姓で御座る。いつも上頭へ御年貢を捧る。当年ももつて登ふと存る。誠に当年ハよの者にもつてのほれと申たれとも、せひそれかしに参れと申によつて、夫故まいる事で御座る。(ア)「いやあれへ一段の者か通。詞をかけふ。なふく。(シ)「此方の事で御座るか。(ア)「いかにもそなたの事しや。とれからとれへ通らします。(シ)「某ハ用を前にあて、あとから先へ行者でおりやる。(ア)「誰あつて用をうしろにあて、先から跡へゆく者かあるふ。つ、ますともいわしませ。(シ)「先そなたわ。(ア)「某ハ越後の国の御百姓しや。毎年上頭へ御年貢を捧ル。当年も持てのほる事でおりやる。(シ)「それハ大義によふ登らしますのふ。(ア)「そなたわとこの人しや。(シ)「それかしハそなたの隣のものしや。(ア)「隣でハ見しらぬかたれておりやる。「佐渡の」38ウ 国の御百姓しや。(ア)「ムウ、国隣とゆふ事か。(シ)「中々。(ア)「何ゆへ登らしします。(シ)「某も独りてさひしかつた。いかにも御同道申さふ。(ア)「左右あらはゆかしませ。(シ)「何かさて御先しや。まっゆかしませ。「それかしからまいろふか。(シ)「中々。(ア)「さあく来さしませ。(シ)「心得た。(ア)「風与詞をかけたに早速同心めされて、此様な嬉しい事ハない。(シ)「世にハ似合ぬ連もあるに、牛ハ牛つれ、馬ハ馬つれとやら申て、そなたも御百姓、そかしも百姓、此様な似合た連ハ御座るまい。(ア)「扱佐渡の国ハはなれ嶋しや程に、越後と違ふて無何かに不自由にあらふなふ。シ「いや、何も不自由な事ハない。殊の外自由な所しや。ア「ハア、たしかに佐渡にハ狐かないと聞たか。シ「あるともくはらくとする程ある。ア「かてんのゆ

かぬ事しや。たしかに狐ハないと聞たか。すれば狐をそなたハ見た事かあるふ。シ「いかにも度々見た事しや。ア「左右あらば狐か有か無イか、かけろくにせふか。シ「夫ハ何をかけふぞ。ア「銘々の一腰をかけふ。シ「是ハ一段とよからふ。此はんたんハ誰かよからふぞ。ア「是ハ御地頭へ往て、御奏者をたのもふ。シ「一段とよからふ。ア「さあく来さしませ。シ「心得た。ア「扱そなたハ物をかたいちに云ふ」39オ 人しや。たしかに佐渡にハ狐ハないと聞たか。シ「あるかないかハ御地頭へ往ハ、しる、事しや。ゆかしませ。ア「イヤ何かとゆふ内に御地頭しや。シ「誠に其通しや。扱そなたハ時の御奏者か、引合か有か。ア「某ハ時の御奏者しや。シ「某ハ引合か有ル。某から納ふ。(ア)「一段とよからふ。(シ)「物申、案内申。ソ「表にあん内と有。あん内とハ何者しや。(ア)「佐渡の国の御百姓で御座る。例年の通、御年貢を捧けます。(ソ)「御蔵の前へおさめませい。(シ)「畏て御座る。扱御奏者多御願か御座ります。(ソ)「何事しや。シ「越後の国の御百姓と風与同道致て路次で申ハ、佐渡にハ狐ハあるまいと申ス。成程御座らねとも、ないと申せハ国の名おれしやとそんなで、有ルと申ました。夫を云あかつて掛禄をいたしました。(ソ)「夫ハ何をかけたぞ。(シ)「銘々の一腰をかけました。何とそあると仰られて下されよう成は、有かとふ存ます。是ハ簞末の事でハ御座れとも、是をあけませう。(ソ)「いや爰な者か、此様な事をうくる事ハならぬ。持てゆけ。(シ)「いやくくるしう御座りませぬ。そうあらは御ふところへおさめませう」39ウ (ソ)「扱夫ハなんしもい、か、つた事しや。なんきにあろふ。(シ)「左様で御座る。(ソ)「汝ハ狐ハ見た事も有まい。(シ)「ついに見た事ハ御座りませぬ。(ソ)「先狐ハ犬よりハ小サイものしや。色ハ狐色と言って黄に赤いものしや。つらハとかつてあつて、目ハ立について、口ハ耳せ、まで切れて、尾ハふつさりとしたものしや。そをさへ言ハさつとすむ事しや。(シ)「いかにも心得ました。(ソ)「越後の御百姓も一所に申あけふ。こふ通せ。(シ)「畏て御座る。(ア)「何と納さしましたか。(シ)「いかにも納た。一所に申あけふと仰らるゝ。出さしませ。(ア)「心得た。越後国の御百姓で御座り

まする。御年貢を捧まする。(ソ)「御蔵の前へ納ませい。(ア)「畏て御座る。扱、御奏者へ御願か御座りまする。(ソ)「何事しや。(ア)「佐渡の国の御百姓と路次より同道致て、佐渡に狐ハないと申、あの者ハあると申まする。夫を言い上つて掛禄をいたしました。(ソ)「夫ハ何をかけたそ。(ア)「銘々の一腰をかけた。何とそ此はんたをなして下されうならば、ありかと存しまする。(ソ)「いかにも心得た。其一腰を是へおこせ。(ア)「畏て御座る。さアく上ケさませ。(シ)「心得た。ア「扱、佐渡にハ狐ハないかちやうて御座りませうな。(ソ)「いかにもない。(シ)「いやく佐渡に狐ハ御座りまする。夫、御座ります。(ソ)「ヲ、有ルともくはらく」40オ する程ある。(ア)「ハア慥にないと承たか、いやなふく。(シ)「何事しや。(ア)「先狐の形りかつかうを問ふ。先、狐ハどのようなものしや。シ「狐ハそれ。ソ「犬く。シ「犬く。ア「犬か何とした。ソ「小サイく。シ「犬よりハ小サイものしや。ア「つらハ。シ「つらか。ア「中く。シ「つらハ。ア「何のようなものしや。ソ「と、。シ「と、。ア「との様なものしや。シ「とかつてある。ソ「いかにもとかつて有ルく。ア「目ハ。シ「めか。ア「中く。ソ「立にく。シ「たつについてある。ア「いろハ。シ「色か。ア「中く。ソ「狐色く。シ「狐色とゆふて黄に赤い。ア「尾ハ。シ「を。ア「中く。ソ「ふう。シ「ふう。ア「尾ハとの様なものしや。シ「ふうさりとした物しや。ア「なるほとふうさりとした物しや。扱、汝ハよふ知て居る。是ハなんしかしや。是を持てゆけ。シ「有難ふ存まする。まふこふ参りまする。ソ「ゆくか。シ「ハア。ソ「よふきた。シ「ハア。ア「さてくかてんのゆかぬ。あの者か申事を御奏者ひつとつて仰らる。いやなふく。シ「何事しや。ア「今一度狐のなりを問ふ。シ「今ので知れて有る。ア「いやくぜひととわふ。先なりハとの様なものしや。シ「犬よりハ小サイものしや。知れた事を問人しや。ア「目ハ。シ「目ハたつについてある。ア「色ハ。シ「色ハきつね色とゆふて、黄に赤いものしや。知れた事を問人しや。ア「なくこゑハ。」40ウ シ「なくこへか。ア「中く。(シ)「犬

よりハちいそふなく。(ア)「それは形りしや。なくこゑをいへ。(シ)「とかつてなく。ア「いや爰な者か。是をいわぬにおいてハ、とちへもやらぬそ。シ「何しや。とちへもやらぬ。ア「中く。シ「あ、今思ひ出した。ア「何としや。シ「ちくわいとなく。(ア)「いやこ、な者か。こちへ皆おくしおろ。(シ)「やいく、汝か一腰ハやらふ。某かハもとしてくれい。(ア)「ならぬそく。(シ)「やいくとふそもとしてくれい。」「ならぬそく。

作り物包銭式つ 百姓物之通」41オ

〈付記〉

本稿を成すにあたり、貴重な資料の閲覧のご許可、並びにご高配を賜りました馬瀬狂言保存会会長河原良治氏をはじめ、会員の方々に改めて深謝申し上げます。また資料調査にご高配を賜りました法政大学能楽研究所、京都大学文学研究科図書館に深謝申し上げます。

(やまもと あきこ 日本語日本文学科)